

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会 事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

市民とともに活動する博物館 ～平成19年度ミュージアム マネジメント研修会より

標記のテーマに基づき、平成19年10月25・26日に紋別郡遠軽町丸瀬布上武利「ホテル マウレ山荘」にてミュージアムマネジメント研修会が行われました。若輩の私がまとめを、というのも恐縮なのですが開催地ということでご指名でしたので報告させていただきます。

テーマにそって、全体司会を務められた斜里町立知床博物館の中川元館長の御采配で、基調講演を市民活動を中心とした調査活動で著名な平塚市博物館より浜口哲一館長に御講演いただきました。「市民とともに活動する博物館」と改めて題されてみると、「あれ？博物館ってもともとそのための施設じゃなかったっけ？いまさらなぜことさらに強調されるようになったのだろうか？」と不思議に感じました。ですが、基調講演の中で、博物館というとても広い定義を持つ施設を「観光型、地域型」等類型化されわかりやすく説明されたことにより、それぞれ置かれた状況により望まれていることと実際に行っていることが整理でき、「市民とともに活動する」上で欠けていることがそれぞれ再確認できたのではないかと思います。平塚市博の場合は設立準備段階から市民活動を前提とすることが上記のような類型化による議論のうえ決定されており、施設のデザインも運営体制もその目的に合わせて準備されていることが紹介されました。確かにいずれの施設も最低限設立にかかわった団体や賛助団体、評議会などの市民組織とのかかわりは持っているはずですが、平塚市博の場合は市民の自発的な活動を促し、それをサポートすることに徹しているように感じられました。そのため、自然発生的に活動団体が生まれ、次々と新たな活動が行われている様子が紹介されました。

事例報告では網走管内の事例として北網圏北見文化センターの柳谷卓彦さんより特定外来種セイヨウオオマルハナバチ駆除に関する市民との取り組みの事例、美幌博物館の鬼丸和幸さんより特別展「美幌の蛍」準備にかかわる町民とのコラボレーションの事例、そして当丸瀬布昆虫生態館からは町民活動から施設設立に至った経緯と現状についての事例がそれぞれ発表されました。それぞれ市民・町民と密接にかかわって活動していく中で学芸員が新たに気付かされ、視野の広い、厚みを持った活動や展示に結び付いていく様子が示されたのではなかったかと思えます。市民に学ぶ学芸員、という諸先輩の叱責を受けそうですが、そういった姿勢が今求められているということかもしないと感じました。

一連の発表を受け、東京農業大学の宇仁義和さんの司会により総合討議が行われました。特に先進例である平塚市博の浜口さんに、活動が衰退してきた団体についてはどうしているのか、行政に批判的な団体がかかわってくる場合はどうするのか等具体的な事例についての質問が集まりました。衰退した団体ではなく一定の成果を終えた団体として成果物を残し、無理に継続させることはあまりせずに次の活動を受け入れていく、批判的な団体

ではないが特定の市民に利益が偏るのではないかということちょっとしたトラブルはあったというような、具体的かつ考えの根底にかかわるような答えが続き、そのたび会場からうむ、という唸りのような声が上がりました。また、網走管内ということで人口密度が低いながら特色のある施設が散在している現状についても少し話題に上りました。もとより道立の自然史博物館などの統括できる施設がなく、厳密にはすべて市町村立のため表だって広域的なカバーをしづらい現状、しかしそれを超えれば広域総合博物館として機能できるのではないかという話も出ましたが、足寄動物化石博物館の澤村寛館長(だったと思います、間違っていたらすみません)の「ウチの館はすでに広域で活動していますよ」という発言に、つまらないことにこだわっている場合ではないのだな、と改めて思わされたように感じました。広域活動が市町村の利益としてもそのうち帰ってくるのだというような事例をうまく示せばよいのかもしれない。

浜口さんの発言にもあったとおり、各施設の類型上の立ち位置や市町村、あるいは広域の現状を分析し、求められる役割は何かという原点を見つめなおすことができたという意味でも意義深い研修会であったように思えました。そうすることで本当に市民にとって必要とされる施設となるために欠けている部分を補うことができるのかもしれない。特に財政の逼迫している町村では、各施設のおかれている現状はいつ「不測の、最悪の事態」に直面してもおかしくない切迫した時代に突入しています。厳しい意見への対応に追われ、見つめなおすような余裕を失いがちですが、そういう時だからこそ理屈でがんばってないで、市民との接点を多く持ち、足元の活動をしっかり見つめなおさないといけないのかもしれない。当館を設立に導いたボランティアの方々から、町民の理解を得るためにどれだけ活動をやってきたか、来館者との接点をどれだけ大事にしてそれを展示や、何より自分たちのモチベーションへの糧としていったか、飲み会のたびにこんこんと聞かされた事を思い出しましたが、皆さんはどのように感じられましたでしょうか。

翌日の施設見学では、マウレ山荘さんの持たれている廃校利用施設「マウレミュージアム」、町民トラストにより動態保存されるにいたった森林鉄道雨宮21号、丸瀬布郷土資料館は丸瀬布郷土史研究会会長秋葉實さんに体調不良を押して案内いただき、当昆虫生態館もその実態をよく見ていただけたのではないかと思います。田舎らしいマルチ経営？ぶりに苦笑を誘う場面もあったようですが、実は骨太で歴史ある町民活動が凝縮されたエリアであることが理解いただけ…ていれば大変幸いです。

まとめといわれてもあまり皆さんのことを存じ上げない若輩者ゆえ、個人的な感想の羅列しかできませんが、開催にあたってご尽力いただいた中川館長、なかばにて急逝された網走管内博物館連絡協議会の和田英昭会長、会計事務全般をお引き受けいただいた米村衛事務局長をはじめ全ての方に感謝を申し上げ拙文を締めくくらせていただきたいとおもいます。ありがとうございました。

(丸瀬布昆虫生態館 喜田和孝)

「北海道博物館フォーラム： これからの博物館を考える —博物館法の改正に向けて」報告

我々の博物館活動の根拠となっている博物館法の改正法案が、2月29日、国会に上程された。社会教育法、図書館法と併せて「社会教育法等の一部を改正する法律案」という議案名で、文部科学省HP国会提出法案の欄で法律案等を見ることが出来る。

当協会と日本ミュージアムマネジメント学会(JMMA)北海道支部の共催で、2月22日、小樽市総合博物館を会場に、表題の会合を開催した。緊急の案内にもかかわらず、全道から60名を超える方々が参集され、関心の高さを伺わせた。

当日の次第は次のとおりである。

- 開会挨拶：丹保憲仁氏(北海道博物館協会会長、北海道開拓記念館館長)
- 歓迎挨拶：菊 讓氏(小樽市教育委員会教育長)
- 基調講演：栗原祐司氏(文部科学省生涯学習政策局社会教育課地域学習活動推進室室長)「博物館法改正とこれからの博物館」(45分間)
- パネルディスカッション
 - ・鷹野光行氏(これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議委員、全日本博物館学会会長、お茶の水女子大学大学院教授)「『新しい時代の博物館制度の在り方について』報告」(20分間)
 - ・高橋信裕氏(日本ミュージアムマネジメント学会事務局長、文化環境研究所所長)「博物館法改正に期待すること・出来ること」(20分間)
 - ・栗原祐司氏「基調講演の補足」(10分間)
 - ・土屋周三氏(北海道博物館協会副会長、JMMA北海道支部長、小樽市総合博物館館長)司会進行
- 討議：参加者から3講師に対する質疑と応答(1時間45分)

講演・発言者の内容の要点を紹介する。

◇栗原氏：昭和26年制定の博物館法に基づいて活動してきた地域の博物館の抱える課題に対して、この数年間、「新しい博物館制度の在り方について」検討を進めてきた。この題名の報告を昨年6月に公表した(この名で検索し文科省のサイトからPDFファイルを引き出せる)。この報告をベースに、博物館の基準(登録制度、評価)、学芸員の資格(養成制度)、現在の博物館利用など、大幅な法改正が必要と思うが、図書館等との兼ね合いもあり、今回は次のような「小規模」なものにとどまった。

- ・博物館資料の定義に「電磁的記録」を追加した。
- ・博物館の事業に社会教育での学習から得た成果を活用する機会を提供、奨励することが加わった。
- ・学芸員補の職の要件に社会教育主事や司書が含まれることとなった。
- ・運営の評価をおこない改善をはかるとともに、地元住民との連携、協力のために情報を積極的に提供するとして新たな条文が加わった。
- ・博物館協議会の委員に、「家庭教育の向上に資す

る活動を行う者」が追加された。

関係者が上記「報告」などをよく検討されたいこと。行政主導から博物館界と使用者主体の博物館への発展を期待すること。近い将来の「改正第2弾」を望むこと。

◇鷹野氏：「新しい博物館制度の在り方について」に織り込んだ理想は今改正には反映されなかったが、現場での活動に生かせる内容でもあるので、是非「報告」をお読みいただきたい。ポイントを述べる。

- ・第2章で、博物館の基本は教育機関であることを改めて確認した。

- ・登録制度は、博物館の社会的地位確立のために有効に機能するよう改めていく必要がある。登録することは、設置者が社会に対して博物館を尊重するという意思表示につながる。他の法との調整をおこないつつ、博物館法の目的が達成されるように公立(教育委員会所管)以外の博物館を含めた制度となるような改革を目指す。

- ・学芸員制度については、アンケートを実施し、地域博物館の実情を調査した。養成制度の在り方、学芸員の専門的資質の向上、上級資格等について検討している。

- ・ICOM等国际的な博物館界の中で、国力に応じた貢献をしてこなかったことへの批判があり、改善が求められる。

◇高橋氏：文環研レポート第25号(2008年2月発行。〔各館に送付済みとのこと〕)掲載の「わが国の文化環境と博物館事情」を資料とする。

- ・「近代」の制度がうまく機能しなくなりつつある今、文化、博物館を真剣に考え直す段階に来ている。

◇土屋氏：北海道では、学芸員1~2名という小規模博物館が多い(協会加盟館3分の2)のが特徴であり、独自の在り方の検討が必要である。

◆報告者感想：近代が終わりにさしかかっているという歴史背景のなかで博物館は如何にあるべきか(丹保会長)を検討する段階としては物足りない改定である。が、国会で審議されることにより、博物館をご存じない国会議員の方々に関心を持っていただく機会となる。博物館としても将来の大改訂も視野に入れながら、国民に向けて博物館を展開していこう。(JMMA北海道支部理事、足寄動物化石博物館 澤村 寛)



石狩・後志
空知地区
News

2008年は年間パスポート導入！ そして化石展を開催!!

滝川市には「美術自然史館」「こども科学館」「郷土館」などが1つのゾーンの中に建てられており、1日で様々な博物館を楽しむことができます。迫力ある太古の動物の骨格標本や岩橋英遠をはじめ優れた美術作品を鑑賞できる美術自然史館。体験を通じて科学を楽しみながら学べるこども科学館。郷土館ではたきかわの歴史や人々の暮らしぶりにふれることができます。

そして市制施行50周年を迎える平成20年度には、さらに博物館が身近なものとなります。美術自然史館とこども科学館の2館を利用できる「年間パスポート」が、いよいよ発売になります。大人料金が1000円（従来の2館共通券800円）で、年度内であれば何度でも利用でき大変お得です。小学生・中学生・高校生もそれぞれご利用しやすい価格で販売しておりますので、ご家族で何度でも博物館で楽しんでいただきたいと思います。

また、夏休み期間中（7月12日～8月19日）には、化石展「MESSAGE-太古からの警告-」を開

催いたします。この展覧会は、道内で発見された化石やそのレプリカを北海道化石会や北海道内の博物館の協力を得て展示し、中生代から現代まで地球がたどってきた道のりを紹介しながら、未来の地球について考えるものです。

来場者は「地球のなぞをさぐる研究者」になり太古の北海道を冒険します。変化し続ける地球、それぞれの時代に生き、化石となった動物たちは、私たちにMESSAGEを送りつづけています。それは過去のできごとを伝える「伝言」なのかそれとも「警告」なのか…そして現代に生還した来場者は「地球温暖化」などヒトが関わる問題に直面します。

これからヒトは地球とどのように関わっていくべきなのか…ぜひご家族でご来場いただき、この問題をいっしょに考えていただきたいと思います。

（滝川市美術自然史館 学芸員 半井 仁）

道南ブロック
News

地域の博物館が問われている事

七飯町歴史館では、平成20年3月7日～26日まで「タイトルのないはっぴょうかい4」と題し、平成19年度に町内小学校の児童が取り組んだ「総合的な学習の時間」の研究成果を展示した。

当館では、これまで資料の貸し出しや解説などで「総合的な学習の時間」を支援するスタンスだったが、もう一步踏み出した形で、地域の博物館が協力できることはないだろうかという模索の結果、この展示が生まれた。4年目にしてはじめて町内すべての小学校から研究成果を借用して展示することができたのも、地道に続けることによって、学校側にも本展示の意図が伝わったからだと思っている。

この展示は、①博物館として学校教育に対して支援すること。②学校以外の場に掲示することによる児童の学習意欲の向上。③家庭・学校だけではなく地域全体で児童を育成するという意識の向上。の3点に繋がればという願いと狙いもある。特に、③を実践するため、研究成果を掲示するだけではなく、研究に携った児童に簡単なアンケートを行い、児童自身の苦勞や驚

きなどを文章化したパネルによって観覧者へ伝えるという手法を用いている。

展示期間中、作品に携った児童が親と見に来たり、児童のみで友人の作品を見に来たり、また、児童とは直接関係のない町民もわざわざ足を運ぶなどしていることから、最低ラインの目標はクリアしているのではないかと思う。展示手法などいろいろと改善する余地はあるが、次年度以降も継続していく予定である。

現在、博物館の行く先には多くの困難が待ち構えているといわれる。入館者の減少、職員不足、予算削減…。そして、博物館自体のあり方が問われ、評価される時代になってきている中で、自分の所属する館の役割を自問自答し、事業や運営について試行錯誤しながら模索する毎日である。

先に紹介した展示も、時間をかけてようやくスタートラインにたどり着いた様なものだ。単に人を集めるだけのイベントではなく、このような地道な博物館の教育活動を誰がどのように評価するというのか…。「町民の研究室であれ」という前任者の言葉が呪文のように頭を駆けめぐると同時に、疑問とも不安ともとれない新たな問題が、未熟な自分を困惑させている。

（七飯町歴史館 学芸員 山田 央）

道北3管内
News

企画展「ちょっと昔を体験」

下川町ふるさと交流館では、収集資料を活用しながら年数回企画展を実施し、郷土学習の機会を提供しています。

今年は夏休み期間中、昔の道具を体験することを目的に企画展「ちょっと昔を体験」を実施いたしました。

内容は台ばかりや身長計を使って昔の単位で体重・身長・足の寸法を計ったり、計算尺・手動計算機を使って計算をしたり、秤を使って重さを計ったり、馬鈴、鐘を手に持って鳴らしてみたり、下駄を履いてみたり、めんこ・剣玉・お手玉で遊んでみたり、レコードを聞いてみたり、昔の教科書を手にとって読んでみたり、炉鉤の高さを覚えてみたり、昔のテレビで古い映像を見たり、昔の鏡で顔をうつしてみたり等、郷土資料を展示するだけでなく資料を實際手に取って使ってみる内容でした。

夏休みと言うこともあって、親子やおじいちゃんおばあちゃんと家族で来館される方が多く、大人は



懐かしがりながら、子ども達に使い方を教えていました。

また子ども達は、近代社会の便利な機械とは違った先人の知恵を活かした道具を手にとって使ってみることに非常に興味を持って体験していました。

(下川町ふるさと交流館 堀北忠克)

日高地区
News門別郷土資料館
リニューアル?しました。

【経過】

日高町は平成18年3月1日、旧日高町と旧門別町が合併し誕生しました。

合併前から郷土資料館の表記・映像資料の更新のための準備を進めていましたが、予算不足のため1年が経過した19年度に常設展示の一部を更新することができました(平成20年3月18日再オープン)。

【更新内容】

1. 門別町の表記を日高町門別地区へ訂正。
2. 沙流アイヌの漁労文化のメカジキ漁想像復元図、メカジキのカムイノミ想像復元図の追加。
3. 平成6年以降の年表の追加。
4. 映像資料の変更。

(特に映像資料は、旧門別町の平成4年当時の様子を紹介していたものであり、現状に合わない箇所もあり、1年間かけて訂正部分の撮影を行いました。)

【見どころ】

1. 映像資料は従来約8分平均のものが3本でし

たが、インスタントラーメンを待つ時間を基本に、約3分で3本に編集しました。日高地区の高山植物、町の新しい祭り、風景を取入れ、見学者を飽きさせない映像としています。

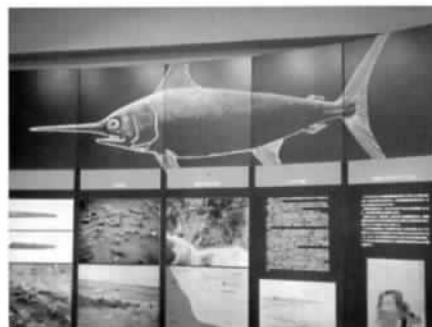
2. 沙流アイヌの漁労文化のうち、メカジキのカムイノミは旧門別町独自のものであり、従来のパネルのほかに、メカジキ漁想像復元図・メカジキのカムイノミ想像復元図、メカジキ原寸図の3枚を追加しました。

【課題】

開館して15年目に展示の更新ができたことは、担当者として望外の喜びですが、あくまで展示の一部更新であり、見学者から「どこが変わったんだ。」の声があがることと思います。

その声にどう応えていくかが、今後の課題であり博物館の仕事と考えています。

(門別図書館郷土資料館 学芸員 川内谷修)



メカジキ原寸図

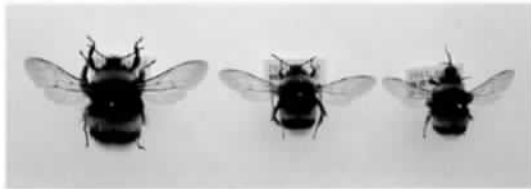
道東3管内
News

道東の外来生物

釧路湿原や阿寒国立公園など手付かずの自然が残る釧路地方にも数多くの外来生物が侵入しておりその影響は深刻です。昨年8月には特定外来生物のセイヨウオオマルハナバチが釧路市内から初めて採集されニュースとなりました。博物館では外来生物問題についての理解と関心を深めてもらおうと「道東の外来生物」を開催しました。展示した道東産外来生物は以下の5種類です。

ウチダザリガニ(特定外来生物)

原産地はアメリカ合衆国オレゴン州で、1930年に476尾が摩周湖に放流されました。持ち出されて再放流されたものが道東地方一円に広がり、道北や道央地方にも分布を広げつつあります。

左から
女王、
オス、
働き蜂網走管内
News

企画展

「森の人ウデヘーウスリー・タイガに暮らす」

北方民族博物館では、毎年2月から3月にかけて企画展をおこなっています。今年度の企画展では、水彩画と民族資料によって、ロシア・沿海地方の自然とそこに暮らす先住民ウデヘの文化を紹介しました。

日本海を挟んで北海道のほぼ対岸に位置するロシア・沿海地方には、「ウスリー・タイガ」と呼ばれる森が広がっています。今から百年前、この地を踏査したロシア軍将校は、自分の体験を基に探検記を著しました。この探検記が、精緻な水彩画によって絵本になったのです。企画展・第一部では、この絵本の原画28点を展示しました。探検の場面とともに、百年前の沿海地方の壮大な風景、森林の様子、アカシカやトラなどの野生動物、そして先住民ウデヘの狩りの様子などが繊細な筆致で描かれています。

企画展・第二部では、ウデヘの伝統的な文化と現代を取り上げました。ウデヘの伝統的な生業である狩猟については、狩猟用の衣服、鹿笛やスキーなどの道具類、毛皮を加工する皮なめし具などの実物資料のほか、仕掛けられた状態の罾を描いた図によって紹介しました。

セイヨウオオマルハナバチ(特定外来生物、写真)

人工授粉がむずかしい温室栽培トマトの受粉に使うため、1992年以降ヨーロッパから輸入されています。96年に日高地方で野外での営巣が初めて記録されたのを皮切りに各地で温室から逃げ出した女王バチの野生化が報告され、在来のマルハナバチや植物への影響が心配されています。

オオモンシロチョウ

1995、6年にかけて北海道南西部、津軽、下北半島など広い範囲で発見され、5年ほどで北海道全域に分布を広げました。

カブトムシ

北海道には本来カブトムシは分布しておらず、人の手によって本州から持ち込まれました。道内に定着したのは1970年代頃で、道北や道東オホーツク海側を中心に幅広く分布します。

アトラスオオカブトムシ

1987年に釧路中央卸売市場でフィリピンから輸入されたバナナについているのを市場関係者が発見しました。99年以降はペット昆虫として大量に輸入されており、逃げ出したり捨てられたものと見られる外国産カブトムシ、クワガタムシが野外で発見される事例が全国で相次いでいます。

(釧路市立博物館 土屋慶丞)

現代のウデヘ文化については、ウデヘが多く住むクラスヌィ・ヤール村での人びとの活動を紹介しました。この村では、今も狩猟が重要な生業であり、伝統的な文化の保存・復興にも力が入られています。写真家・福持英助氏による人物写真で村の日常や狩猟の様子をご覧いただくとともに、文化復興活動の成果として、伝統文化をモチーフとした彫刻や工芸品を展示しました。

これら以外に、失われつつあるウデヘ語や森林の保護活動について、資料や写真で紹介しました。また、展示内容に親しみを持っていただくために、ウデヘ語のCDブックコーナー、参考図書コーナー、民族衣装体験コーナーなどを設けました。

この企画展によって、日本ではあまり知られていないロシア・沿海地方の自然や先住民の文化について、興味をもつ方が少しでも増えていただければと思っています。

なお、本企画展の開催にあたっては、(財)北海道北方博物館交流協会、(財)北海道文学館、北海道立文学館を始め、多くの団体、個人の方々にご協力いただきました。記して感謝いたします。

(北海道立北方民族博物館
学芸員 中田 篤)

ウデヘの狩猟用具の展示

動物園・水族館
News

45年目の冬期開園

現在当園では、本年6月共用開始に向け、チンパンジー、マンドリル、リスザルの施設を集合したサル舎を建設しています。

新しい施設は、室内放養場を設け、飼育環境の改善に配慮するとともに、天候不順な日も動物を観察できるよう、入園者用の通路を屋内に確保し、動物本来の能力や習性を引き出す工夫のされたサル達を魅力たっぷり観察できるようにいたしました。

このサル舎の建設により、私たちの長年の夢だった冬期開園が実現できる事になりました。

昭和38年に開園した当園は、獣舎が冬期用に整備されていない事による飼育動物の健康面、日中も氷点下となり凍結、凍上を繰り返す通路で入園者の安全性の確保などの課題があり今日まで冬期(11月～4月)の開園は行われていませんでした。

しかし、帯広の冬の祭りである「氷祭り」と併せた臨時開園の実績と市民要望を踏まえ、何時かは…との思いが職員の中にありました。

寒暖の差の激しい帯広では、フタコブラクダ、ア

メリカバイソンの冬毛は見事です。

首を伸ばして屋根の上の雪を食べるキリンや、雪山の上を元気に動きまわるホッキョクグマなどなど…。まだ、全ての獣舎が冬期用に整備されているわけではなく、開園時間が昼間の三時間と短い事や、天候によっては展示が制限される動物も出てきますが、この冬期開園によりようやく道内の他の園の仲間入りをさせてもらえたような気持ちであります。

市のほぼ中心部にある敷地面積は道内で一番小さな動物園です。お得な900円の通年券をお買い求めの上、ぶらりとお立ち寄り下さるのをお待ちしております。

(おびひろ動物園 園長 大西正典)



新サル舎完成予想図

学芸職員部会
News

平成20年度学芸職員部会活動

■平成20年度学芸職員部会総会

学芸職員部会総会研修会が開催される。

開催日：(予定) 9月25日(木)・26日(金)

開催地：檜山渡島管内知内町

研修テーマ：(仮称)「地域の教育施設・教育者としての博物館・学芸員」

図書館、文化ホール、公民館などと同様な社会教育施設である博物館。博物館以外の社会教育施設は地域の人たちに親しまれている。しかし博物館・学芸員は一般の人はもちろんだが、学校教育、社会教育担当者を持っている機能が認められていないようだ。教育施設・教育者として認知され、機能を最大限に発揮していくための博物館・学芸員の在り方を考える。

■平成20年度の学芸職員部会活動

1977年(昭和52年)7月に学芸職員部会が設立してから31年が経っている。博物館を取り巻く状況が変わってきている。しかし博物館の基本は変わっていない。それは博物館が持っている物を活用していくことである。こうしたことを認識しながら、平成20年度の

学芸職員部会が抱えている二つの大きな課題に向かっていきたい。

一つは北海道博物館の情報をデジタル化し発信することだ。インターネットを通じて幅広く公開すること。そのためにはシステムと発信する情報を整えていかなければならない。

二つ目は北海道博物館ガイドブックの編集発行である。1999年(平成11年)7月に『北海道・新博物館ガイドブック』が北海道新聞社から発行された。しかし、発行以降に行われた地方自治体の平成の大合併に伴っての移転、名称変更などガイドブックとして現状には適していない。さらに絶版となって一般読者の手に入らない。再発行のためには、編集内容の組み立てが必要となる。

生涯学習社会といわれてから久しい中で、博物館に求められる役割は大きく変わってきた。従来の展示主体型の施設、地域観光資源としての位置づけなどから、さらに一步踏み込んで独自の企画展示や博物館教育にもとづくワークショップなど企画運営を行うとともに、小中学校の総合的な学習や教科学習への手伝い、リハビリなどの社会福祉などの視野が広がっている。そのため情報提供などが期待されている。こうした状況に応じられる学芸員・博物館の在り方を探っていきたい。

(部会長 西谷榮治@利尻町立博物館)



科学館クラブとヒルガタワムシ

旭川市科学館では、教育普及の中心事業として科学館クラブを開催している。小学生5・6年生を対象とした初級には、実験クラブ（木曜日、金曜日、日曜日の3コース）、生き物・地球クラブ、電子工作クラブ（木曜日、金曜日、日曜日の3コース）、木工模型クラブ、星・宇宙クラブ、パソコンクラブ（木曜日、日曜日の2コース）6分野が開設され、前期（5月～9月）と後期（11月～2月）それぞれ10日間開催している。

当館の敷地のうち約5,000㎡は野外自然観察空間と位置付け、旭川市近郊の雑木林の形成を目指している。この空間内には、トンボ池と称する小さな池も造成している。

生き物地球クラブでは、自然観察空間に生息する昆虫、土壌動物、淡水プランクトンなどの観察をとおし、様々な環境に生き物がいることと生物の多様性について学習している。

また、冬期には、ロゼット植物や越冬昆虫の様子を雪を掘って観察し、身近な生き物の暮らしを紹介

し、普段目がいけない部分に焦点を当てた学習を行っている。

しかし、積雪期には観察可能な生きた教材が少なく、簡便な方法で入手できる地元の生物を探していた。

越冬昆虫の観察の際、観察空間に積み上げていたハルニレの剪定木にウメノキゴケと思われる地衣類が付着していた。室内に持ち帰り乾燥した地衣類や蘚苔類を剥がしてシャーレに入れ、一晩水に浸しておいたところ、ヒルガタワムシの仲間や線虫類を容易に観察できた。

このヒルガタワムシ類は、クリプトビオシスの状態にあったものが、水分を補給されたことにより、活動を開始したものである。クリプトビオシスは、緩歩動物に属するクマムシでよく知られているが、輪形動物に属するワムシの仲間でも同じように、環境条件が厳しくなると頭部と尾部を胴部に納め、酒樽型になって休眠することが知られている。

一見すると生き物が住みそうにない環境にも生き物がいること、過酷な環境で暮らす生き物の適応などを身近なところで、しかも季節を問わずに容易に体験できることがわかった。次年度からこの意外な生き物の観察をクラブメニューに加えることを検討している。

（旭川市科学館 南 尚貴）



第16回北海道美術館 学芸員研究協議会報告

3月6日・7日の2日間にわたり北海道立近代美術館において、第16回北海道美術館学芸員研究協議会が開催された。全道の美術館・博物館学芸員及び博物館学、美術史研究者からなる65人の会員、6名の新会員、これから設立が予定されている美術館学芸員などオブザーバー10名が参加。初日は奥岡茂雄会長のあいさつにはじまり、総会の後、「北海道の美術10年 その歩みと課題」と題したシンポジウムを開催。奥岡会長の、時代の推移のなかで美術館のあり方を考察した基調講演のあと、NPO法人環境研究機構理事長である亀谷隆氏は、「北海道の博物館事始め」と題し、近年まとめられた『北海道博物館史料』のデータに基づいた道の博物館の特徴を分析した発表。続く三浦綾子記念文学館齋藤傑副館長から北海道の美術館と市民について、吉田豪介前市立小樽美術館長から北海道の美術館と作家について、笹野尚明前札幌芸術の森美術館長から北海道の美術館と行政についての、それぞれ経験談を交えた発表に、美術館という施設の使命を改めて認識する機会

となった。

二日目の研究協議は、「展示照明のポイント」と題し、松下電工(株)東京Archi LABの藤原工氏から、多様な照明器具の照度、演色性など詳細な分析のうえで、いかに効率的な照明ができるかという、実践的な講義をいただいた。特にスポットライトや蛍光灯に少しの工夫を加えることで、作品、来館者にとっても明らかに鑑賞しやすくなる、画像、製品をとりまぜての明解で具体的な実践例は、「もっと聴きたかった」という参加者の声を生むものとなった。

続いて釧路市立美術館の角井学芸員は、財団法人地域創造が行う公立美術館巡回展支援事業について、同館でこの助成を利用して展覧会を開催した経験から、大きく利用しやすくなった制度として紹介。北海道美術史年表の編纂事業を、札幌芸術の森美術館吉崎学芸員が報告。すでにウィキのサーバ上に基本的なデータがアップされており、プロジェクト・チームを編成し、詳細なデータ入力を実施していく計画を説明。新加盟館の石狩美術館、紋別市立博物館からそれぞれの館を紹介、佐藤友哉副会長のまとめを最後に、美術館の歴史から展示活動に至るまで幅広い研修の機会となった、充実した2日間のプログラムを終えた。

（北海道立近代美術館 主任学芸員 久米淳之）

館園の主な展覧会と普及事業

(2008年4月～7月)

石狩

- 札幌芸術の森美術館(011-591-0090)
4/15～5/15 「イタリア美術とナポレオン」展
北海道開拓記念館(011-898-0456)
4/26～6/29 テーマ展「カナディアン・ロッキーと大平原のくに～アルバータにいきづく多文化～」
4/26(～毎月1回で全12回) 歴史講座「忠敬、蝦夷地をゆく」
5/25 講演会「アイヌ伝承ばなし」をさぐって」
6/21～7/27 移動博物館「歴史再発見「日高の風」(様似町にて開催)
7/18～8/24 テーマ展「鶴見良行、東南アジア・北海道を歩く」
7/20 テーマ展関連講演会「チャハヤ号航海記」
北海道立近代美術館(011-644-6881)
4/22～7/2 これくしょん・ぎやらりい「追想 一片岡球子の世界」
4/26～6/8 特別展「北海道の水彩画 みづゑを愛した画家たち」
7/12～9/4 特別展「没後40年 レオナルド・フジタ展」

後志

- 西村計雄記念美術館(0135-71-2525)
3/14～7/13 特別展「おやこで楽しむ展覧会 Lights ! ひかりのおはなし」
余市宇宙記念館(0135-21-2200)
4/19～10/31 特別展「国際宇宙ステーション・きぼう」

空知

- 砂川市郷土資料室 (0125-52-2339)
5/16～6/22 特別展「砂川アルバム～市制50周年～」
富良野市博物館(0167-42-2407)
4/26～5/31(予定) 「エイブル・アート展」
5/17 自然観察会「早朝バードウォッチング」
三笠市立博物館(01267-6-7545)
7/19～10/13 特別展「桂沢湖に眠る太古の記憶」

胆振

- 仙台藩白老元陣屋資料館(0144-85-2666)
3/20～4/13 企画展「わが家・わたしの宝物」
4/19～5/11 企画展「しらおいの刀工 渡部安秀」
4/19 講演会「刀工 渡部安秀について」
4/19～5/6 企画展「武者人形」
7/19～8/17 特別展「北海道の鳥瞰図」

7/19 講演会「吉田初三郎と鳥瞰図世界」

網走

- 北海道立北方民族博物館(0152-45-3888)
7/19～10/19 特別展「海と川の物語～北西海岸インディアンのくらしと美～」
4/5～4/20 ロビー展「こんにちはモンゴル～海外協力隊員が見たモンゴルの今～」
4/26～6/25 ロビー展「大昔の大きな動物～サハのマンモスを知ろう～」

事務局日誌

(平成19年7月～平成20年3月)

平成19年(2007)

- 7/19～20 第46回北海道博物館大会開催(函館市)
7/24 日本博物館協会の平成19年度顕彰候補者の申請
8/17 平成19年度アイヌ民族文化財専門職員等研修会の後援承認
9/7 平成19年度(財)日本博物館協会支部助成金の申請
9/7 平成19年度ミュージアム・マネジメント研修会開催に対する助成(交付)
9/11 第22回北方民族文化シンポジウムの後援承認
9/27～28 学芸職員研修会・部会総会開催(白老町)
10/25 第2回役員会開催(遠軽町丸瀬布)
10/25～26 ミュージアム・マネジメント研修会開催(遠軽町丸瀬布)
11/17 平成20年度北海道博物館協会表彰関係書類を送付
11/25 会費未納会員に対する請求書を送付
12/27 文部科学省の博物館法改正検討に関する協力

平成20年(2008)

- 1/4 博物館法の改定検討に関するフォーラムの共催およびパネリストの依頼
1/23 博物館法の改定検討に関するフォーラム開催案内および参加者募集
1/24 平成20年度の主な展示会および普及事業計画の調査(依頼)
1/29 北海道開拓の村・アイヌ民族博物館共催 棚橋賞受賞記念 中村齋先生記念講演『博物館はひとです』の後援依頼
2/20 道博協ニュース第92号原稿執筆依頼
2/22 北海道博物館フォーラム開催(日本ミュージアムマネジメント学会北海道支部共催)
3/28 平成19年度第3回役員会を開催(KKR札幌)